

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大阪船場の旧家の四姉妹（鶴子・幸子・雪子・妙子）のうち、長女の鶴子は婿養子を迎えて家を継いだ
が、今は夫と共に東京に住んでいる。二女の幸子は結婚して芦屋に住んでいて、悦子という娘がいる。鶴
子の家で暮らしていた雪子は、二月中旬から幸子夫婦の家に滞在していたが、雪子になつている悦子が
狸紅熱にかかり、その世話をするので東京に帰りそびれていた。末娘の妙子は写真館を営んでいる板
倉との結婚を考えているが、周囲は賛成していない。妙子は幸子を「中姉ちゃん」、雪子を「雪姉ちゃん」
と呼び、姉たちは妙子を「こいさん」と呼んでいる。描かれた時代は昭和十三年前後である。

妙子が何と思ったのか、今の間にちよつと東京へ行つて来る、といい出したのは、悦子の病気がそういう風
に日増しに快癒しつあつた五月上旬のことであつた。彼女がいうのには、自分はどうしても一週本家の兄さ
んに直談判をして、お金の問題を解決しないことには気が済まない、自分は洋行は止めにし、今急に結婚
するというのでもないが、少し計画していることがあるので、貰えるものなら早く貰いたいし、又どうしても
兄さんが出してくれないのなら、そのように考え直さなければならぬ、勿論このことについては中姉ちゃ
んや雪姉ちゃんに迷惑が懸らないように、単独で、穏便に掛け合うつもりであるから、心配しないで貰いた
い、ついでに、別に今月でなければならぬという訳でもないが、雪姉ちゃんが此方に来ている間の方が、泊
めて貰うにも都合がよいと思うので、ふつとその気になつたのである、自分はそんな狭い家の、子供が大勢騒
いでいる所になんぞ、ゆつくり泊つていたくはないから、用が済んだら直ぐ帰つて来る、見たいと思うのは芝
居ぐらいなものだけでも、それもこの間此方で道成寺を見ればかりだから、今月はどうでもよい、という
のであつた。幸子は、掛け合うといつても誰を相手に掛け合うのか、計画していることといふのはどんなことな
のか、などと尋ねたが、近頃はややともすると二人の姉達に反対されるので、容易に「A」を割らないよ
うになつては、妙子は、そうはきはきは質問に応じないで、掛け合いの相手には先ず鶴子を選ぶつもりである
と、それで埒が明かなかつたら、直接義兄にぶつかつても敢て辞しないらしいことを洩らしただけで、「計
画」なるものが何であるかは余り明らかにしなかつた。が、重い「B」から少しずつ幸子が聞き出した
ところでは、何か玉置女史の後援を得て、婦人洋服店の小規模のようなものを始めてみたい考えがあつて、そ
の資本金に金が欲しいのであるらしかつた。「I」、折角だけれども妙子の希望は恐らく受け容れられない
ものと、幸子には思へた。義兄にして見れば、彼の承認を経た正式の結婚以外には金を出さないというい分
に、今も変りがある筈はなく、「II」妙子が職業婦人になることにはあんなに強硬に反対なのであるから、
左様な計画は以ての外だといふであろう。「III」、それなら全然出来ない相談であるかといふと、ここに
一つ微かながら可能性があるのは、妙子が直接義兄にぶつかつて話す機会に恵まれた場合である。なぜといつて、
義兄は生れつき小心なところへ持つて来て、若い時分から幸子以下の小姑たちにいじめられつけて来たので、
蔭でこそ強硬な意見を吐くけれども、面と向つては「C」が弱く、少し此方が強く押せば折れてしまうとい
ふ風であるから、妙子がちよつと嚇かして懸ればどういふ結果にならないとも限らなかつた。妙子もそれが狙
いであり、それに一縷の望みをつないで東京行きを思い立つたのに違いないので、義兄は彼女に掴ま
えられないように逃げ廻るであろうが、彼女もさるもので、掴まえる迄は幾日でも頑張る覚悟かも知れなかつた。

幸子は、妙子が突然こんな時に上京するといふ出したのは、今なら幸子も雪子も一緒に附いて来る筈がない
のを見越し、わざとそういう時期を選んだのではないかと推測出来るので、そう考えると、又心配になつて
来るのであつた。妙子は口では穏便に掛け合うといつてはいるけれども、次第に依つてはこれで本家と絶縁して

も構わないというくらいな気で、義兄にぶつかる下心があるのではないか。それだから、幸子や雪子に附いて来られては困るのではないか。そういつてもそう過激なこととは思いうけれども、時の弾みでどんな工合に脱線しないものでもない。「Ⅳ」そんなことになったとすると、義兄は義兄で、幸子が自分を苦しめるために妙子を出して寄越したという風に、曲解しないものでもあるまい。こういう話で妙子が上京するというのに、幸子が附いて来ないということは、彼女が努めてこの問題に無関係でありたいことを示すものでもあるが、解釈のしようでは、義兄が苦境に陥るのを高みから見物してやろうという、意地の悪い気があるのだとも取れなくはあるまい。義兄にそう思われるのはなお忍ぶべしとしても、姉までが、幸子ちゃんはいいさんが出て来るのを止めてでもくれることか、あんな乱暴なことをいわせに寄越した、とでも思つて恨むようなことがあつたら、幸子として立つ瀬がなかつた。それならとつて、悦子のことはこの際雪子に任せて置き、妙子の計略の裏をかくて自分も東京へ附いて行くという「D」を打つとすると、金を繞つての兄妹の争いの中へ捲き込まれることは必然であり、そして一層困つたことには、その場合どちらに味方をしてよいか、彼女自身の腹が極まつていないのであつた。雪子にいわせると、洋服店を経営するというこいさんの計画の蔭には板倉が干与していることは明らかで、邪推をすれば、それは本家から金を引き出すための口実であり、金さえ取つてしまえば又どんな風に計画を変更しないものでもない、こいさんはああ見えても、案外お人好しの一面があるから、恐らく板倉のいなり次第に利用されているのであろう、だからこいさんが板倉と切れない限り、お金など出してやらない方がよい、というので、それも一つの観察ではあるが、幸子にして見れば、妙子があれほど意気込んで懸つているものを、横合いから邪魔をしてまで不成功に終らせるには忍びないところもあつた。彼女は妙子が自分達の忠告に従わないで、板倉との約束を貫徹する気であるらしいことに不満を感じているけれども、かといつて、若い女の身空で誰の世話にもならず、一本立ちをしようとする健気な妹の志を思えば、徒に義兄の味方をして弱者いじめをしたくはなかつた。その使い方がどうであるにしろ、兎に角それを独立の資金に充てようというのであり、又妙子ならば実際それだけに使いこなす能力を持っているのであるから、義兄が預かつているものがあるなら、出してやつて欲しいという気が、彼女にはあつた。然るに、妙子に同行して東京へ出かければ、否でも応でも本家と妙子との間に立たされる羽目になり、ややもすれば姉に口説かれて、心ならずも本家に味方せざるを得なくなるであらう。彼女はそれも厭であるが、さればとて、判然と妙子の側に立つて姉夫婦を圧迫する程の義侠心は尚更ない、というのが正直なところなのであつた。

(谷崎潤一郎 『細雪 (ととめゆき)』による。一部改変)

問一 二重傍線①②③④の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 二重傍線⑤⑥⑦の文中の意味として最も適当なものを、ア～オから選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | |
|--------|----------|---------|---------|--------|--------|
| ③さるもの | ア 愚か者 | イ したたか者 | ウ 部外者 | エ 不審者 | オ 立派な人 |
| ④次第 | ア 意向 | イ 順序 | ウ 段取り | エ なりゆき | オ 理由 |
| ⑦心ならずも | ア 心配しながら | イ 無遠慮に | ウ 不本意だが | エ 無意識に | オ 無分別に |

問三 空欄〔 I 〕～〔 IV 〕に入る語として最も適当なものを、それぞれア～オから選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|
| I | ア あるいは | イ かりに | ウ とすると | エ ともかく | オ なぜなら |
| II | ア しかるに | イ それゆえ | ウ ともあれ | エ まして | オ やはり |
| III | ア けだし | イ しかし | ウ そして | エ それゆえ | オ たとえば |
| IV | ア すると | イ それなら | ウ だから | エ つまり | オ もし |

問四 空欄〔 A 〕～〔 D 〕に入る語として最も適当なものを、ア～コから選び、符号で答えなさい。なお、符号は一度だけ選択しなさい。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 足 | イ 頭 | ウ 口 | エ 腰 | オ 舌 |
| カ 手 | キ 鼻 | ク 腹 | ケ 耳 | コ 目 |

問五 波線 i～v の主語として最も適当なものを、ア～キから選び、符号で答えなさい。なお、同じ符号を何度選択しても良い。

- ア 悦子 イ 義兄 ウ 鶴子 エ 幸子 オ 雪子 カ 妙子 キ 板倉

問六 この作品を朗読することになった X さんは、傍線を引いた「此方」の読み方について、次のように考えた。空白部 A から E に入る語句を選び、符号で答えなさい。なお、同じ符号を何度選択しても良い。

「此方」の意味は、「話し手のいる場所」である。「こちら」「こつち」「こなた」などと読む。「此方」は、「彼女がいうには」から「今月はどうでもよい」までの、(A) の言葉の中に出てくる。その中では (B) が「中姉ちゃん」、雪子が「雪姉ちゃん」となっているので、作者は会話らしい雰囲気を出そうとしていると思われる。そう考えると、「こなた」は古風な言い方で不釣り合いである。文章語としては「 C 」が標準的であるが、口語的に「 D 」と読む可能性が高い。「そんな」や「 E 」も口語的な言い方であろう。

- | | | | | | | |
|-------|-------|--------|------|------|------|------|
| ア こちら | イ こつち | ウ こなた | エ 鶴子 | オ 幸子 | カ 雪子 | キ 妙子 |
| ク 悦子 | ケ 直ぐ | コ ちよつと | | | | |

問七 妙子の計画とはどのようなものか、最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 洋行して洋裁の勉強をする。
 イ 小規模な洋服店を開業する。
 ウ 機会を見つけて本家と絶縁する。
 エ できるだけ早く板倉と結婚する。
 オ 義兄に直談判して言うことを聞かせる。

問八 X さんは幸子の考えを次のようにまとめたが、不適当な箇所がある。その部分を正確に引用し、どのように修正すれば良いか、二十字以上二十五字以内で書きなさい (ただし、句読点や記号を含む)。

自活しようとしている妹のために、姉夫婦と対立するのいやむをえない。

なお解答は《「○○……」を「××……」と修正する。》のように書きなさい。

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～⑩の熟語の読みを、ア～トの中から選び、符号で答えなさい。

- ①浅薄 ②設置 ③排斥 ④攻略 ⑤連携
⑥虚脱 ⑦励行 ⑧稚魚 ⑨明瞭 ⑩軽率

ア	いつだつ	イ	きはく	ウ	きよだつ	エ	けいこう	オ	けいそつ
カ	けいべつ	キ	けいりやく	ク	こうりやく	ケ	せつち	コ	せんぱく
サ	そうち	シ	ちぎよ	ス	はいせき	セ	はいせつ	ソ	めいせき
タ	めいりよう	チ	ようぎよ	ツ	れいこう	テ	れんけい	ト	れんたい

問二 ①～⑩の熟語と最も意味の近い熟語を、ア～トの中から選び、符号で答えなさい。

- ①是認 ②漂泊 ③貢献 ④誘導 ⑤繁荣
⑥留意 ⑦互角 ⑧妥当 ⑨鎮圧 ⑩傍観

ア	放浪	イ	平定	ウ	復興	エ	平等	オ	伯仲
カ	配慮	キ	展望	ク	適切	ケ	追従	コ	隆盛
サ	洗濯	シ	正常	ス	賞賛	セ	支配	ソ	座視
タ	肯定	チ	懸念	ツ	協力	テ	寄与	ト	案内